

# 中英語頭韻詩における phraseology

## 脚韻ロマンスとの比較を中心に

鎌田 幸雄

### 1. Phraseology of Middle English Alliterative Poetry

中英語頭韻詩に生起するいくつかの表現 (phraseology) について、口承定型句理論の中で発達した、定型組織 (system) と鋳型 (mould) の概念を援用して説明した。具体的には *Morte Arthure* (以下 *MA*) で *with* + (DET) + ADJ. + NOUN の構造を有し、NOUN を定項 (constant) とし ADJ. を変項 (variable) とする 3 種類の定型組織が想定できることを示し、詩人がその行の文脈・頭韻・韻律の条件に合致した変項 (ADJ.) を選択すると考えられることを示した。

また、*William of Palerne* (以下 *WP*) で *To* + VERB for 'tell' + *þe* + NOUN for 'truth' の構造を有し、NOUN を定項とし VERB を変項とするほぼ同義の 3 種類の定型組織が想定できることを示し、詩人の詩作過程の中に定型組織よりも深いレベル (鋳型のレベル) での類推作用が想定できることを示した。詩人はその行の文脈・頭韻・韻律の条件に合致した定項 (NOUN) と変項 (VERB) を選択すると考えられる。

*The Wars of Alexander* (以下 *WA*) において、(as) + *þe* + NOUN for 'book' + (PRO.) + VERB for 'says' と *þe* + ADJ.-est + PREP. + (DET.) + NOUN of place の構造を有する語句を示し、それぞれの生起例から鋳型を想定できることを示した。

*The Siege of Jerusalem* (以下 *SJ*) において、Prep. + (DET) + ADJ. + *wyse* の構造を有し、*wyse* を定項とし ADJ. を変項とする定型組織を想定できることを示した。さらに *The Destruction of Troy* (以下 *DT*) においては、同じ定型組織を *SJ* よりも遥かに多くの形容詞を変項として使用し、文脈に応じて展開されていることを示した。

また、*DT* において、PREP. + (DET.) + ADJ. + *haste* の構造を有し、*haste* を定項とし ADJ. を変項とする定型組織を想定できる。しかし *MA*、*WP*、*WA*、*SJ* ではこの定型組織に起源を有すると想定される定型表現は使用されていない。*DT* 詩人が独自に発達させた定型表現であると考えられる。頭韻詩人は特定の「統語・韻律の単位 ('grammatical' unit)」に基づいて、その行の頭韻・韻律・文脈に合致した表現を独自に展開していると考えられるが、*DT* で使用されているこの定型組織はその典型的例の一つと考えられる。

### 2. Phraseology of Middle English Rhymed Poetry

中英語脚韻ロマンスの作品に生起するいくつかの表現 (phraseology) を脚韻という詩的制約を中心に据えた観点から説明を試みた。まず *Stanzaic Morte Arthure* に生起する *As I you* + VERB for 'say' の形式の表現について、*As I you* を定項 (constant) とし VERB for 'say' を変項 (variable) とする定型組織を想定できることを指摘し、詩人は主としてその行の脚韻音の要請に応じて VERB for 'say' の動詞を選択していると考えられることを示した。

また、Masui (1970:123) は、中英語脚韻詩では 'speed, immediacy, togetherness, certainty' を表す語句が脚韻位置に生起する傾向にあることを指摘しているが、中英語脚韻ロマンスの表現 (phraseology) の一側面を考察するに際し、Masui のこの指摘に沿った形で中英語脚韻ロマンスに生起する脚韻語句について検討した。

まず、'speed, immediacy' を表す語句について、*Bevis of Hampton* (以下 *BH*) の生起例を中心に検討した。*BH* では句として *in hast* (3/8)<sup>(1)</sup>、*on hie* (7/8)、*on highing* (5/5)、*in (a) rape* (3/3) が使用されており、語として *belive* (9/10)、*anon* (18/72)、*son* (4/31)、*swithe* (3/40)、*fot-hot* (6/6) が使用されていたが、語により脚韻位置に生起する割合が異なっていた。また *anon right(s)* (25/25)、*son anon* (3/3)、*swith blive* (3/3) のように類義語を重ねて脚韻位置に生起し、脚韻句を形成している例が見られた。

'togetherness' を表す語句については、*Ywain and Gawain* (以下 *YG*) の生起例を中心に検討した。*YG* では句として *in fere* (14/14)、*on rawe* (1/1) が使用されており、すべて脚韻位置に生起していた。語として *bydene* (10/10)、*samen* (6/8)、*togeder* (2/6) が使用されていたが、語により脚韻位置に生起する割合が異なっていた。

'certainty' を表す語句については、*Guy of Warwick* (*MED* で *Guy (I)* と略称される作品。以下 *GW*) の生起例を中心に検討した。語として *iwis* (84/84)、*sikerly* (48/49)、*trewlich* (2/4)、*apligh* (18/18)、*verramentt* (4/4) が生起し主として脚韻位置で使用されていたが、語により生起数がかかなり異なっていた。また *for soþe ywis* (8/8) のように類義語を重ねて脚韻位置に生起している例が見られた。

さらに、中英語脚韻詩に広く使用されている *without* + NOUN について、couplet 詩として *BH* の例を、tail-rhyme 詩として *Amis and Amiloun* (以下 *A&A*) の例を考察した。

*without* + NOUN は句全体として 'immediacy' や 'certainty' を表す句を形成している場合が多いが、*BH* でも同様であり、'immediacy' を表す句として NOUN の部分に *abod*、*dwelling*、*ensoine*、*let*、*mo*、*sojur*、*targing* が

使用されている例が見られ、‘certainty’を表す句として NOUN の部分に *faile*, *fable*, *les*, *lesyng*, *oth*, *sake* が使用されている例が見られた。詩人はその行の脚韻の要請に合致する語を選択していると考えられる。

Tail-rhyme を使用している A&A では、octosyllabic line の部分で、BH と同様に、‘immediacy’を表す句として NOUN の部分に *abod*, *delay*, *duelling*, *strif*, *mo* が使用されている例が見られ、‘certainty’を表す句として NOUN の部分に *faile*, *les*, *lesyng*, *wrong* が使用されている例が見られた。詩人はその行の脚韻の要請に応じて語を選択していると考えられる。また tail-line の部分では、*without* と NOUN の間に修飾語句 (*ani* や *more*) をいれて行全体を占めている例が散見された。

### 3. Some Comparison of Usages between Rhymed and Alliterative Poems

頭韻詩と脚韻詩の表現 (phraseology) についていくつかの語句を取り上げ、比較を試みた。まず *without* + NOUN 句について検討した。脚韻詩の場合、韻律は弱強の規則的なリズム (x/x) で、詩行後半の 2 歩格を占め、*without* に後続する名詞が脚韻を踏む。一方頭韻詩の場合は、基本的に *without* に後続する名詞が頭韻を踏むが、弱音節の音節数が一定ではない。また、*without* の語頭音/w/ が頭韻を踏む場合も散見された。

次に *on hye* と (*als*) *tite* という句の使用法を検討した。頭韻詩の MA ではそれぞれの句の名詞が第 2 強音節に生起し、その行の頭韻を踏んでいる。

The hale howndrethe <i>on hye</i> 2108a <sup>(2)</sup>	jit þat traytour <i>alls tite</i> 3886a:
Bott zitte þe hathelieste <i>on hy</i> 2109a	Takes townnes <i>full tyte</i> , 3151a

一方脚韻詩ではそれぞれの句が脚韻位置に生起して、脚韻句として機能している。

Ermin answerde blive <i>on highe</i> : BH 927	I had me yolden to the <i>als tite</i> , YG 3653
That other thanne flegh <i>an highe</i> BH 2655	Than fel the tother bifore <i>als tyte</i> . YG 686

また、頭韻詩の MA では *with* + (DET) + ADJ. + *wordes* という構造の定型組織を発達させ、その行の文脈・頭韻・韻律に合致した ADJ. を選択している。

wyth austeren <i>wordes</i> , 306b	with thy gret <i>wordez</i> ; 2580b
with hawtayne <i>wordez</i> : 1058b	with full meke <i>wordes</i> : 3056b
wyth heyn3ous <i>wordes</i> , 268b	with thi mery <i>wordez</i> ; 260b
with knyghtlyche <i>wordez</i> .506b	with his mylde <i>wordes</i> , 3197b
with meruayllous <i>wordez</i> . 3383b	with thi skornefull <i>wordez</i> , 1840b

一方脚韻詩の *Confessio Amantis* においては *with* + (det.) + *wordes* + ADJ. という句を発達させ、その行の文脈・脚韻・韻律に合致した ADJ. を選択しており、MA の表現と極めて対照的である。

And sche the king with <i>wordes wise</i> 1.3345	Caroles with my <i>wordes qweinte</i> , 1. 2730
Al openly with <i>wordes pleine</i> 2.2919	This Maiden with hire <i>wordes wise</i> 1.3224
Bot openly with <i>wordes glade</i> , 7.4860	This Nessus with hise <i>wordes slyhe</i> 2.2199
Deceived ben with <i>wordes soft</i> e 7.2496	And he tho with hise <i>wordes felle</i> 5.2744
The vois of god with <i>wordes cliere</i> 7.2643	For Juno with hire <i>wordes hote</i> , 5.4617

詩人たちは、頭韻詩や脚韻詩という詩的伝統の中で発達した表現を吸収しつつ、自らの作品の詩行上の文脈や韻律や押韻の要請に合致した表現を独自に発達させていると考えられる。

(1) / (slash) の右の数字は頻度数を示し、左の数字は脚韻位置の生起数を示す。

(2) 数字は行数を示し、数字の後の a や b はそれぞれ a-verse (前半行)、b-verse (後半行) を示す。

#### 引用文献

Masui, Michio (1970). "Further Consideration of Chaucer's Rimes," 『広島大学文学部紀要』第 29 巻 2 号 pp.92-124.